豊臣秀吉と肥前名護屋
佐賀県立美術館「桃山三都」展によせて

福岡市博物館総館長　**中　野　　等**

佐賀県立美術館では、佐賀新聞社と共に主催して特別展「桃山三都―京・大坂と肥前名護屋―」（会期：令和６年12月６日～令和７年１月29日）を開催した。

本稿は、同展の関連イベントとして開催した下記講演会の講演録である。掲載にあたっては、当日の講演内容を基本とし、文意を損ねない範囲で補訂等を加えた。また、講演後の質疑応答については掲載を省略した。

【特別展「桃山三都」関連イベント】

日　時　　令和６年12月14日（土曜日）
　　　　　13時30分から
会　場　　佐賀県立美術館ホール
講　師　　中野　等　氏

【講師紹介】（敬称略）

中野　等（なかの　ひとし）
福岡市博物館総館長／九州大学名誉教授

〇略歴

昭和33年（1958年）、福岡県生まれ。
福岡県立嘉穂高等学校、九州大学文学部卒業。
昭和60年から柳川古文書館の初代の学芸員。
柳川市史編さん事業を立ち上げる。
平成７年（1995年）、「豊臣政権の研究　朝鮮侵略と太閤検地」で博士号（文学）取得。
平成９年から九州大学大学院比較社会文化研究院助教授、平成18年から同教授。
令和６年（2024年）３月、九州大学を定年退職、同４月から福岡市博物館総館長に就任。
名護屋城博物館において、特別史跡名護屋城跡並びに陣跡保存整備委員会委員、特別史跡名護屋城跡並びに陣跡保存活用計画策定委員会委員長などを歴任。
豊臣政権論、文禄・慶長の役に関心をもち、研究を進めている。

〇著作等（一部）

『豊臣政権の対外侵略と太閤検地』（校倉書房、1996年）
『文禄・慶長の役』（吉川弘文館、2008年）
『太閤検地』（中央公論社、2019年）、ほか多数。
近刊として、『関白秀吉の九州一統』（吉川弘文館、2024年３月）

講演録
「豊臣秀吉と肥前名護屋」

中野　等

過分の御紹介をいただきました。今でも九州大学のと形容詞がつきそうなんですけれども、御案内がありましたように今年４月から福岡市博物館の総館長という職に就いております中野でございます。よろしくお願いいたします。

それでは、一応何かお持ち帰りいただくものがあったほうがいいだろうと思って資料はつくっておりますけれども、報告資料はお配りしているレジュメを少し補綴したものを用意しております。お手元は暗いかと思いますけれども、スクリーンのほうを中心にお話をして、資料は恐らくお買上げいただくであろう図録と一緒に持ち帰っていただいて、事後の復習に供していただきたいというふうに考えております。

それでは、お粗末な話になりますけれども、よろしくお願いいたします。

私も昨日ちょっと拝見させていただいて、今日も午前中、展示を見させていただきました。三都であるかどうかは措いたとしても、桃山時代のきらびやかな感じがよく伝わるし、これだけのものが一堂に会して、見る機会というのはなかなかないと思いますので、とてもよい展示だと思っております。

たまたま今年の漢字というのが、いつも清水寺で発表されますけれども、「金」でしたね。あれは「かね」と読むのかもしれませんけど、まさに秀吉の時代というのは今年の漢字にふさわしい金の時代でありまして、あちらこちらにきんきらきんのものが飾ってある。豪華という見方もあるし、下品じゃないかという言い方もあって、いろいろ評価は分かれると思いますけれども、秀吉が生きた時代、あるいはその前後の時代を考えていく上でとても充実した展示であると考えております。

今回のお話はこういうタイトルで、皆さんが「桃山三都」展を御覧になる上で、時代的な背景のようなものを幾つかお示しできればよいのかなというふうに思っているところです。

肥前名護屋が秀吉の「朝鮮出兵」、「大陸侵攻」、「唐入り」、いろいろ言い方はありますけれども、それの拠点であったことは間違いのない事実であり、そういうことから肥前名護屋に日本中の大名が集まったということも、これも紛れのない事実であります。

ただ、どんなふうにこの肥前名護屋地区が機能したのかとか、どれぐらいの人口があったのかとか、いろんなことはあるんですけれども、実はなかなか細かいことがよく分かっていません。今日の話は少し堅くなるかもしれませんけれども、いろんな史料を示させていただいて、それらを皆さんの中で膨らませていっていただければそれでいいのかなと思っております。

前置きがちょっと長くなりましたけど、スライドで紹介しているのは唐津の名護屋城博物館にあるジオラマですね。今回展示されている肥前名護屋城図屛風を基にしたもので、私は博物館に行くといつもこれを見るのが楽しみで、とてもよくできたジオラマだと思います。

秀吉と名護屋城ということで話をさせていただきます。少し細かな話になりますけれども、文禄・慶長の役、いわゆる朝鮮出兵の簡単な流れについておさらいをして、さらに深掘りをしていきたいというふうに思っています。

文禄・慶長の役というのは、教科書的にいうと日本の国内を統一して、さて次は外国だみたいにして乗り出すイメージがあるかと思うんですけれども、実は朝鮮出兵というのは、先ほど浦川和也さん（佐賀県立美術館副館長）のほうから紹介がありましたけど、私が最近書きました本がそうなんですけれども、九州平定のとき

に既に始まることになります。和暦で天正15年、西暦で1587年ですけれども、秀吉が九州にやってきて、鹿児島の島津氏を討伐するというあの戦ですね。本当は戦後、博多に凱旋しようと思ったのですけれども、博多はその頃、戦火の後で焼け野原だったわけで、隣の箱崎、今も筥崎宮がありますけれども、あそこに一月ほど滞在します。本来、秀吉は鹿児島の島津氏をやっつけた後、そのまま朝鮮に渡る予定だったところが、箱崎の陣営に対馬の宗氏が秀吉に臣従するためにやってきます。秀吉は宗に対し対馬一国を充行うので、その代わり朝鮮の王様を日本に連れてこいという要求を出すことになります。ということで、九州平定の後、すぐさま秀吉が朝鮮に押し渡るということは計画倒れになります。朝鮮国王を日本に連れてくるようにという命令を受けた対馬の宗氏はそこから大変苦労していくわけですけれども、取りあえずそれで朝鮮渡海は先送りになります。

その後、小田原の北条氏を倒し、秀吉本人は今の会津まで北上しますけれども、会津まで行って東北地方の平定を行うと、そこで日本全国の平定が終わりましたので、次は朝鮮半島というか、明帝国を滅ぼすために出兵するということになっていきます。

文禄・慶長の役というのは前後７年ぐらい続くんですけれども、私の中の理解は、最初の１年は「唐入り」といいまして、唐というのは中国のことを指しますから、明帝国を攻める戦でありました。朝鮮半島というのは、あくまで明に行くための経路であって、朝鮮王朝を倒すことはこの戦争の本来の目的ではありませんでした。それが文禄２年に、これは名護屋城を考えていく上でとても大きなポイントになってきますけれども、明国からもう戦争はやめましょうよと使節がやってきます。そこで一回、明帝国を征服するという戦は終わりますので、前後７年に及ぶ戦なんですけど、大きな転換点が文禄２年５月に訪れることになります。ここで、秀吉の中では一旦最初の戦争の目的が終わってしまうわけですね。ということもあって、秀吉は名護屋を後にして、大坂へさっさと帰ってしまうことになる。大坂へ凱旋する計画はあったんですけど、予定が早まったのは、大坂で豊臣秀頼が生まれるんですね。彼にとっては２人目の子供ですけれども、お兄ちゃんは赤ちゃんのときに死んじゃいますから、待望の跡継ができたので、帰る予定をかなり前倒しして、さっさと大坂へ帰ってしまうことになります。

その後、しばらく講和交渉が進んでいくんですが、明や朝鮮には負けたという認識はないんですけど、秀吉は勝った気でいるわけですね。講和交渉は始まりますが、こうしたネジれた状況で、勝ったと思っている秀吉と、負けたとは絶対思っていない明帝国の間で話が合うわけありません。結局、講和交渉は破綻していきます。そして、戦争に勝ったという証を取るために再派兵することになります。これが慶長の役となります。ところが慶長の役の最中に秀吉が死んでしまいますから、それで停戦になります。戦争が終わったわけではありません。取りあえず秀吉が死んでしまったので戦闘はやめようということで日本の軍勢は朝鮮半島から引き揚げてきます。戦闘状態は終わったんですけれども、日本と明あるいは朝鮮との間の国家間の戦争という状況はまだ終了しておりません。それを終わらせる為に朝鮮から派遣されてくるのが、いわゆる朝鮮通信使というものになっていきます。だから、国交が回復した段階で停戦が、本当の終戦というか、正式に戦争が終わることになります。大体こんな感じの流れであります。

文禄の役、これは朝鮮半島全体で、加藤清正という人は、ちょっと地図では切れていますけれども、今の中国東北部にまで入り込んでいき

ます。それから、慶長の役は、先ほど戦に勝った証を取るための戦だというふうに言いましたけれども、戦国時代、戦に勝ったらどうするかというと相手の領地を自分のものにするわけですから、秀吉は朝鮮半島の南部を日本の領土にしようと思って慶長の役を進めていくことになります。そんなことを韓国で言ったら怒られるわけですけどね —— というのが慶長の役の一つのバックグラウンドとなります。

では、朝鮮出兵はいつから始まるかなんですけれども、さっき言いましたように、理念的には九州平定の直後から始まりますが、関東・奥羽が終わった後に実は朝鮮出兵の具体的な準備にかかっていくことになります。喜連川家の文書をご覧下さい。喜連川家というのは、室町幕府の関東公方の流れをくむ家です。本名は足利という家なんですけれども、そこに残った文書の中に次のようなくだりが出てきます。「小西摂津・毛利壱岐参上候、唐入り来年ならるべき旨に候で云々」ということで、天正18年、これが「駿府より」とありますから、関東・奥羽平定を終えて、会津から江戸を経て京都に帰ってくる途中の今の静岡市で、秀吉の側近であった山中長俊という人が出した手紙です。駿府に小西行長と毛利吉成、ここに書いていますが、豊前小倉の大名ですけど、この両名を呼んで、関東・奥羽が平定されたので、来年からいよいよ唐入り —— 唐入りというのは中国に入るという意味ですから、大陸、いわゆる朝鮮出兵のことになります。朝鮮出兵を「来春」ですから、すなわち天正19年の正月ですね。実際は20年の３月になりますから、１年前にその計画があったことが分かります。その準備金として金子300枚を貸与というのがあって、ちょっと気になるのは「御人数御書立」というのも用意されている。どうもこれは戦争に動員する大名のリストだろうと思います。こんなものを準備して、貸与とありますけど、実質には下賜するんだと思いますけれども、熊本の宇土の小西と豊前小倉の毛利に準備を進めるようにということで、金子300両を与えて準備をさせていくと、史料にあります。ただ、実際には、九州もそうなんですけれども、秀吉の軍勢が来た後、どうしても揺り戻しがあるんですね。九州でも九州平定の後に熊本の佐々成政に対する一揆がありますし、佐賀でも諫早のところで大きな内乱が起きますから、大体いつもそうなんですけど、秀吉の軍隊がばーっと来て平定したかに見えるんですけど、在地の反対勢力というのはそう簡単に潰れてしまうわけではありませんので、揺り戻しがあります。奥州でも大崎・葛西一揆とか、出羽でも仙北一揆とか、九州の平定の後より、もっと大規模な内乱が起きまして、海外に軍勢を出すような状況ではありませんでした。結果的に出兵は１年遅れてしまうことになります。ただ、こんな形で天正18年段階から実質の戦争の準備が進んでいたということは御記憶いただければと思います。

それと今回、なるべく名護屋の日常というか、日本国内の史料では追いきれないところを拾っていこうと意識しましたので、ヨーロッパのカソリックのイエズス会の史料をなるべく多く採用してお話を組み立てています。これもそうなんですけれども、イエズス会、カソリックの団体ですけれども、それが日本でいろいろ布教活動をしていますよ、という報告をローマのイエズス会の本部に定期的に送っていくんですね。その中の一つにこれが出てきますけれども、この辺をちょっと読んでいくと分かりますが、秀吉は朝鮮出兵を進めていく上で４人のキーパーソンを指名しています。朝鮮出兵、明帝国征服がうまくいけば朝鮮半島に新たな領地をもらう大名として、４人の大名の名前が上がってきます。小西行長、加藤清正、それから、黒田官兵

衛の息子の黒田長政、この辺の３人は著名というか、皆さん御存じだと思いますけど、もう一人、毛利吉成という人もこの資料の中に出てきます。先にふれた人物ですね。世代的にいうと、毛利が一番年長で、次に小西、加藤、黒田くらいの順じゃないかなと思いますけれども、毛利吉成は、まだ秀吉が木下藤吉郎と言っていたぐらいから働いている人物で、古参中の古参みたいな人ですね。朝鮮で新しく大名に取り立てるぞと言っているぐらいなので、この４人が少なくとも出兵の最初の段階では日本側のキーパーソンとして考えていい人物だと思います。

そんな感じで、さっきの喜連川家文書が天正18年でしたけど、その年の年末の資料に小西若狭守という人物が登場します。「小西」の苗字から小西行長の家来であることは間違いないんですけれども、この人、この史料しか残っていませんで、実名が分かりません。この人が天正18年12月27日付で、名護屋城が建つことになる肥前松浦の有浦大和守という人物に充てて書状を出しています。この書状の中に、「よって、名護屋御主殿御作事奉行として拙者まかりこし候」というくだりがあります。

さきにみた天正18年８月の段階では名護屋という文字は一文字も出てきませんので、朝鮮出兵をやるから、朝鮮に軍勢を出すからどこか拠点をつくるように準備しろという命令は出ているんですけれども、それが名護屋に特定はされていませんでした。ところがこの年の年末には既に秀吉が朝鮮半島に押し渡る拠点として名護屋が出てくる。有浦氏は松浦の国衆なので、今の名護屋城のあの名護屋であることは間違いがないことになります。

熊本のほうに残った軍記だと、この小西若狭守は小西行長の養父と出てくるんですね。養い親と出てくるんです。ただ、小西行長は堺の商人の出なので、養父というのがどういう意味かよく分からないんですけれども、ただ、小西という名字、それから行長の「行」の字をもらっていて、小西行長の代わりに名護屋に城を造るための奉行として派遣されていることから、小西の家来の中でもかなり上級の人であることは間違いのないことだろうと思います。いずれにしても、天正18年の年末には小西行長の重臣、恐らく家老だと思いますけれども、小西若狭守が名護屋に派遣されていて、何らかの準備をするので、地元に対して協力するようにという手紙を出しています。

最初から名護屋じゃなかったのかということなんですけれども、実は最初は、先程言いましたように、九州平定の直後に実際に朝鮮半島に押し渡ろうとしていましたので、そのときは、博多を拠点に考えていたようです。ここに幻の博多築城計画と書いていますけど、博多に城を建てて、そこから直接朝鮮に行こうとしていた嫌いがあります。ただ、これについては具体的にはよく分かりません。最近ちょっと私も関わっている秀吉文書の、秀吉の手紙を一括にまとめた資料集を作っていますけど、その中でこれが採用されたんですけれども、秀吉がある城の普請の状況についてこの連中に問いただしたという文書なんですね。その城と書いてあって、どこか分からないんですけれども、充所のメンバーから見て、これは天正15年の史料だろうと考えられます。天正15年６月段階で秀吉が命じて城を建てさせた可能性があるところは筑前博多しかないので、取りあえず博多城の建築を促している書状だと考えていますけど、これについてはまだほかに史料が出てきていないので、どうとも言えないところがあります。いずれにしても当初は博多に城を造って、そこから朝鮮、明国に行こうとしていました。ところが、この間に奥羽の内乱、東北地方で内乱があったりして出兵の時期が遅れるわけで、その間に出兵の基

地が肥前名護屋に替わるということになります。その間の状況を伝えてくれているであろうのがフロイスの「日本史」となります。この人は先程紹介したイエズス会の宣教師です。「日本史」という書物を書いて、フロイスが実際に見聞きした日本の状況を物語にまとめている史料ですね。さっきイエズス会の本部に日本の活動報告を提出していますよと言いましたけど、これを書いたのもルイス・フロイスという同じ人です。毎年毎年、年報という形で年度報告をするんですけれども、その報告書を基にしてまとめたのがこのルイス・フロイスの「日本史」という書物になります。ただ、この資料はいついつということが正確に書いていないんですね。さっき言ったみたいに一年一年の年度レポートを基にして、ある段階で整理して書いているので、昔のことと今のことがごちゃごちゃとなっていて、その点でちょっと扱いが難しいということ。それからもう一つは、業績報告書なので、時に過剰報告をしていたりするので、数字に関わるところは気をつけないといけないということがあります。きちっといついつというのを押さえた書き方をしていないので、読んでいくときにある程度の想像力を働かせないといけない史料ではあります。とはいえ、秀吉と大名たちのやり取りが、そのまま肉声が伝わってくるような資料なので、それはそれで面白いところです。

これによりますと、秀吉は直ちに家臣に向かい、九州地方には、軍勢を朝鮮へ比較的容易に渡航させるいかなる港があるのかと質問し、家臣らは、肥前の国のドン・ブロタジオ、つまり有馬晴信、彼の兄で波多殿、名護屋の領主ですね —— という異教徒の武将の領内に名護屋という極めてよい港がある。そこは平戸から13里隔たっており云々と応えています。1,000艘の船が安全に出入りできるからいいんだということを誰かが進言したということになっている。問題は、誰が進言したかというのがとても大事なんですけど、そこは書いていない。その言葉が終わるか終わらないかのうちに秀吉は、直ちに都地方並びにいろんなところに住んでいる日本の大名や重立った武将に、その名護屋に合流して結集することを命じたということになっています。本当はもうちょっと緻密な現地調査が、恐らく小西とか、さっき言った加藤とか、毛利吉成とか黒田長政が九州のあちこちを回って、ここがいいですよと決めたんだろうと思います。

ちょっとその辺が割愛されていて、誰かが言ったからそう決まったとなっています。ここで注目されるのは、「その地は僻地であって、人が住むのには適しておらず、単に食糧のみならず、事業を遂行する際の全ての必需品が欠けており、山が多く、しかも一方は沼地で、あらゆる人手を欠いた荒れ地であった」という箇所です。何か怒られそうですけど、名護屋というのはそういうところだから大変だぞということを言っているわけです。とはいえ、秀吉の命令は絶対でしたので、比較的短期間の間に城を造ることになります。のみならず、「その短期間にここには全く新しい一都市が出現した。そして、そこには関白と共に住まう人たちばかりでなく、朝鮮に向かうために結集したほかの人々を含め、おびただしい人々が滞在することになった」と、記されています。

この資料はお手元のプリントにも上げておりますので、きちっと読んでいただければと思いますけれども、いずれにしても最初は博多であったのが、よい港がほかにないかということで物色した結果、肥前名護屋が選ばれることになりました。ここは全くの未開発地だったんですけれども、あくまで自然の良港ということで、名護屋が出兵のための拠点に設定されるということになっていきます。

では、誰が名護屋の城を造ったのかというこ

となんですけれども、こちらは比較的有名な資料ですが、石田正澄といって、石田三成の実兄ですけれども、これが人吉の大名である相良頼房に宛てた手紙の中にこういうくだりが出てきます。天正19年、さっきのから比べて１年後ですね。「来年三月朔日に唐へ入らせられるべき旨に候、おのおの御出陣、御用意もっともに候、名護屋御座所御普請、黒田甲斐守、小西摂津守、加藤主計仰せいだされ候、筑紫衆は軍役三分の一ほどずつ用捨つかまつり候へと御諚候云々」ということで、天正19年にとっての来年ですから天正20年、すなわち文禄元年の３月１日付で中国に押し渡るので、名護屋に御座所 —— 御座というのは秀吉に対する敬称です。秀吉がお住まいになるところをつくるための奉行がこの３人ですよと。この３人がお城を造るので、その分、兵役を３分の１免除しましょうというのがこの史料になってきます。

ちょっと細かい話になっていきますけど、ここに出てくるのは普請という言葉です。その前の段階のこれでは作事という言葉が出てきます。普請と作事という言葉は、今は日常的にあまり区別して使わないと思いますが、厳密に言うと、普請というのは土木事業のことを言います。その上に物を載っける建築のことを作事というふうに言います。だから、普請があって作事があるんですけれども、これは時間的にずれてきていますから、土木事業をやるのがこの３人ということですね。全体のプランが小西によって進められて、それが「御主殿御作事」という言葉で恐らく—— 作事するためには普請がないといけないので、どこにどういう城を建てるかというグランドデザインをやったのが、少なくとも見える範囲では小西で、実際その基本プランに基づいて普請をやったのがこの３人の大名というふうに考えることができます。

同じようなくだりは「豊前覚書」という、これも聞き書きの史料なんですけれども、小西がやっぱりリーダーシップを取って、肥前名護屋の地を出兵のための拠点に決めましたということが書いてあるので、それはそれで恐らく小西がリードする形で名護屋城というのは進められたんだろうというふうに思います。

後年、黒田官兵衛孝高が縄張をしたという話が出てくるのは出てくるんですけれども、一次史料でそれを確認することはできませんので、むしろ今見えている感じでいくと、黒田孝高が基本設計をしたというよりは、むしろ小西行長がリーダーシップを取ってやったと考えるほうが整合的かなと思っています。

名護屋城というのは、これは空中写真ですけど、見て分かりますように水深のあるすとんと落ちた湾が入り組んでいて、あと特徴的なのは小山がたくさんあるんですね。ぼこぼこと言ったら怒られますけれども、こういうふうになっている。私たちはどうしても名護屋の本城だけを考えていくんですけれども、小西のこの史料からいくと、ただ本城があればいいわけじゃなくて、「六十余州の御陣所」というふうにしてこの中で出てくるんですけど、日本中の大名が集まって、秀吉が住まう本城名護屋城の周りにたくさんの大名屋敷を置かなければいけないんですね。そこら辺から考えると、既に都市化が進んでいる博多よりは、あまり褒め言葉じゃないんですけれども、山ばかりあって何もないところだというのは、実は都市計画の観点からいうと絶好の立地ではなかったのかと思われます。人が住んでいないからこそ、新たな人工都市をつくるに当たって、これほどの最適地はなかったとも言えましょう。

以前の私は海の切り込み方とか水深の深さで博多を捨ててこっちを取ったんだろうと思っていたんですけど、最近こういう資料を読み出していって、ぽこぽこ小山があって、後からの話

になりますけど、山一つが大体陣所のような感じになっていくんですね。だから、誰々はあの山、誰々はこの山みたいな形で割り振っていけば陣所を造ることもできていきますし、それなりの防御対策も取れると思いますから、水深の深い切り込んだ湾という海事上の条件だけじゃなくて、ぽこぽこした山がたくさんあるというのが恐らくここが拠点に選ばれた理由だろうというふうに思っています。そんな形で名護屋城が造られていきます。

実際誰がどういうふうに造っていったかというのがとても大事な話なんですけれども、ここら辺がなかなか分かりにくいというか、よく分からないところなんですが、同じようにフロイスの続きの話ですけれども、とにかく６か月ぐらいで名護屋城が造られたということが分かります。「秀吉からそれらの築城を命ぜられた司令官たちは、実に正確に、また異常な努力をもってなされ、６か月、もしくはそれ以内に全てが完成したほどであった」とあり、また「数え切れぬばかりの人たちがそこで働いたが、とりわけ主力の集結場となる名護屋では２つの巨大な城壁が造られ、それらは切断しない自然石で築かれた。」ともあります。この辺、これから先の、私も史跡の調査員のメンバーではありますけれども、こういう記述を少しよりどころにして考えていく必要があるのかなと思っていますけど、内側の城壁は外側よりも小さく100プラザ、プラザというのは面積の単位なんですけれども、今の単位でいいかどうか分かりませんけど、現在使われている単位でいうと64万平米、えらく広大ですけれども、64万平米の面積があり、その中に関白の宮殿が造られた。ほかの外側の城壁は後で造られ、最初の内側の城壁が完成した後であったが、それは内側とは比較にならぬほど大きく、それらは２つとも無数の巨石で築かれ、まさしく都の聚楽第と同様の石垣による大きな堀に囲まれていたということで、かなり大規模な城が短期間に築かれました。このとき、実は「雪の島」とありますけど、これは長崎県の「壱岐」ですね、壱岐と対馬と、それから名護屋と、３か所の城を半年ぐらいで複数の大名に一斉に造らせているということが、ここから伝わってきます。

単位は、この時代のプラザの単位と今のプラザの単位が一緒かどうか分かりませんけど、少なくとも今使われているやつでいくと64万平米というかなり大規模なものになってきますけれども、そういう大規模な城が造られたとあります。それから、先程から申しあげているように年代記ではないので、いつどうなった、どうなったじゃなくて、一括してさっとまとめて書いてあるので、分かりにくいのですが、名護屋城の普請・作事行為というのは終わりなくずっと続いていくようです。そういう築城のプロセスもフロイスのこういう描写の中にいみじくも反映されています。

続きを見ます。「間もなく実におびただしい家屋がそこに建てられたが、それらは諸侯がその家臣たちと共に移住するためでなく、商人や、売店とか旅宿、それに類した職の人々も住むためのものであった。かくて真っすぐで立派な街路を備えた、非常に大きく美しい都市が出来上がった」というところが、ちょっと注目されるところです。

今回も展示されていますが、肥前名護屋城図屏風の下半分ぐらいは城下町の描写になっています。あれは俯瞰して見ているので、なかなか真っすぐで立派な街路を備えたふうには見えないんですけれども、丘陵には大名の陣屋が設けられており、一方、結構計画的に谷の道路を切って、計画都市として造られたのであろうということがこの記述の中から浮かび上がってきます。つまり、最初に言いましたけど、何にもないと

ころに、丘がぽつぽつあったわけで、その丘には陣所を置いて、谷、平地のところは結構計画的に道路を切って城下町を設定したということが分かろうかというふうに思います。

それと、町の治安のことなんですけれども、お配りしている資料の中に「豊前覚書」という史料から、もう一か所紹介しているんです。そこで、秀吉が名護屋に入ったときに刀狩りをやるという史料が出てきます。これだけ人工の都市を計画的に建てたわけで、いろんなところからいろんな人がやってきますから、中にはちょっと凶暴なというか、乱暴者もいるかもしれませんから、刀狩りを徹底しているという資料が出てきますので、その辺を折り畳んで話を考えていくと、何にもないところに計画都市をつくって、いろんな人を誘致してくるんですけれども、そこでは武装解除させた人たちが入ってくるということで、恐らく平和で秩序立った町をつくろうと思って秀吉はこんなことを言ったんじゃないかなというふうに思います。

それと、もう一つは大名の陣屋なんですけれども、これについてはちょっと相反する見解が２つあるので、その２つを紹介します。

これは「菊亭家記録」といって、秀吉が名護屋に下向した時の記録です。４月24日、博多の東にある名嶋から来て、25日に秀吉が名護屋城に入ってくるんですけれども、「深江より四里来たりて肥前唐津の川に舟橋を架ける。名護屋の御要害 ―― これ城のことです ―― 天守以下聚楽に劣ることなし、かねて九州衆の全ての陣屋を仰せつけられ、屋敷一つに三間、四間の茅屋三宇ずつこれを造り、あるいは板ぶき、広間、書院などでしょうね ―― 書院など調うもあり、皆似相似相に一屋敷ずつくだされ」というふうにあって、名護屋の本城には、聚楽第と比べても匹敵するような天守閣があったようです。

その次に、九州衆みんなで陣屋を造ったと言っているんですね。先程の資料と考え合わせていくと、名護屋城の本体については黒田と小西と加藤が担当するんですけれども、その周りに、申し上げましたように、それぞれの丘に１個ずつ大名の陣屋を造っていかなければいけないんですけれども、それがどうも、まずは九州の大名たちが割り当てられて、あちこちに陣屋を造ったんだというふうに、これは読めます。面白いのは、屋敷一つに３間、４間の茅屋を３軒ずつ造ったと。要するに、それぞれの屋敷地に、縦３間、横４間の屋敷を３つずつ造ったとあります。茅ぶきのやつもあったり、広間もあったりするんですよと。みんな「似相似相」というのは、石高とか大名の格とかに応じて大小があるんだと思いますけれども、今風に考えていけば、名護屋城の本城の周りに画一的な施設がどうも造られて、それに九州の大名たちに割り振られて造られたんじゃないだろうかと読めます。

それから、ちょっと細かな話になって恐縮ですけれども、名護屋城本体を造ったのはこの人たち（黒田・小西・加藤）なんですが、ここに筑紫衆は軍役３分の１ずつ免除とあるんですけれども、この人たちのことを筑紫衆、九州の大名と呼んでいるのか、この人たちも含めてほかの九州の大名も軍役、戦時負担を３分の１にしているのか、どっちに読むかまだ決めかねているところがあるんですが、仮に本城はこの人たちが造って、先程、画一的な施設と言いましたけれども、あとの陣屋の分はほかの九州の大名たちが割り振られて造ったと考えられれば、この九州衆というのは九州の大名全部ということになります。その辺はまだこれからどう詰めていくか、考えていかなければいけないことなんです。ただし、そういうふうに書いてあるかと思えば、フロイスはまた別の言い方をしております。

フロイスの続きを読みますね。「短期間にこ

のような大事業を成し遂げるためには、全大名が関白の命により多くの家屋を造ることを請け負わされ、そのために彼らは自分の領地のお城からおのおのの屋敷を移転させるという方法が取られた。それらは木造なので、大した困難もなく移動できる」といったことが書いてあります。今回の展示されている黄金の茶室もそうですけれども、江戸時代までの日本建築というのは、くぎとかをあまり使わずにばらすことができるんですね。簡単に移築をすることができますし、それはこういう民家だけじゃなくて、お城の天守閣だって壊して造り直したりすることがありますし、お城の門がどこかのお寺の山門になることはよくある話で、そんなことがあるので、どうも一回デフォルトとして画一的な施設を造るんだと思いますけど、うちはちょっとこれじゃ足りないよみたいなところが出てくると、大名がそれぞれ自分の領国から屋敷なり御殿なりを解いて、それを名護屋に持ってきて移築させたんじゃないかと思わせる記述が確認できます。こういうこともあって、分かっているようであまり分かっていないのが実情で、これからいろいろ研究なり何なり進めていかなければいけないんですけれども、そんなところです。

次に、いよいよ出来上がった名護屋についての描写を行っていきたいと思います。これについてはお手元に資料を配っておりました。平塚大和守滝俊という人、この人は佐竹という ―― 佐竹は関ヶ原の合戦の後に秋田に移ってしまうので、秋田の大名のイメージが強いんですけれども、もともとは常陸の大名ですね。そこの重臣の平塚滝俊という人が、３月17日に殿様が京都を出て、４月22日、当国肥前名護屋に着きましたと。私たちも無事に着きましたよという感じで、それまでのいきさつを長い長い手紙なんですけれども、国元の水戸にいる佐竹家中の同僚に対して書き送った手紙です。持って帰って楽しんでもらおうと思って全編コピーしていますが、全部しゃべっていると私の講演があさってぐらいまで続くことになりますので、大事なところだけ紹介をいたします。

お手元の資料には番号を打っています。１番から３枚目の８番まで、そこまでが肥前名護屋のありさまを伝えた部分になります。それから、９番から12番までは水戸から京都を経由して名護屋にやってくる佐竹の一群が豊前の小倉でほかの大名とけんかをするんですね。たくさんの軍勢が動いていきますから一番困るのは船の手当てなんですけれども、その次は泊まるところの手当てです。今はインバウンドでホテル代が高くなっていますけれども、あれと同じで、たくさんの大名がどんどん西にやってきますから、宿泊施設があまりないわけですね。先にどうも小倉の宿を佐竹のほうが押さえていたらしいんですけれども、そこに信州の ―― またこれも毛利という名字でややこしいんですけれども、信州の大名がやってきて、俺のほうが先だと言いかけて、大名同士でけんかするんですね。佐竹の家来は信濃の大名をひっくり返したりして結構リアルで面白い記事が載っているところですが、それは別の話になるので、今日はやりませんので帰って楽しんでいただければと思います。

面白いのは、お手元のやつでいくと11番目、３枚目の下の段の11の後に12がありますけど、その12と書いたやつから数えると５行目、石田三成のことがちょっと出てきます。私は三成の伝記も書いているので、ちょっと気になったので少しだけ紹介していますけれども、水戸の大名の佐竹と信州の大名の毛利がけんかするんですが、それを石田三成がとても喜ぶという記述が出てくるんですね。「石田殿には右の様子聞こし召され、世の常ならぬ御褒めごとにて候、御喜びの由に候」ということで、三成というの

はちょっとクールなエリート官僚のイメージがあるんですけれども、大名同士がけんかしているのをいいぞ、いいぞと言って喜んでいると。豊臣大名と言いながら、戦国の気風がまだ色濃く残っているんですね。それこそ忠臣蔵じゃありませんけれども、武門の誉れを傷つけられれば、相手が大名だろうが何だろうが引き倒してでもやっつけるぐらいの気概がまだあって、それを三成が殊のほか褒めているというちょっと面白い史料であります。

それから、そのいざこざがあって、13番目から最後までは、繰り返しになりますけど、これは道中記になります。佐竹が特に京都から九州に入ってくるまでのいろんな見聞きしたものを書いています。その中には、今、大河ドラマでやっている源氏物語にゆかりのことなんかがずっと、須磨がどうとか明石がどうだとか、ここは平清盛が何したところだとかいうことが出てきていて、道中記であると同時に当時の武家、中級の武士たちのインテリジェンスの高さというか、教養の深さがよく分かるような史料で、随分長い史料なんですけれども、読み応えがあるというか、読み甲斐のあるというか、面白い史料だと思います。

お手元のやつでいくと、４番ぐらいですかね。名護屋城の石垣なども、「京都にもまし申し候由、石を皆割りてつき上げ申し候、天守なども聚楽のにもまし申し候、名護屋の在所は西の海、くるわくるわ山にてはなく候、くるわくるわ入り、海切れ申し候、町中へ直ちに唐船を着け候、さらに見事なるところにて候」ということで、元来何もなかった名護屋ですけれども、秀吉が入城する頃には石垣も京都の聚楽第にも勝るぐらい立派で、とてもきれいな町が出来上がっているというふうに言っています。半年ぐらいの短期間の突貫工事だったんだろうと思いますけれども、非常に整備された城下町が出来上がっているということが分かります。

町のにぎわいについては、お手元のやつでいくと６番辺りからになります。「町中京・大坂・堺の者ども、ことごとく参り集い候間、何にても望みのもの候、なかんずく、米穀・馬のはみ、餌ですね —— などは山のごとくにて候」ということで、博多とか唐津の近隣の商人が集まることは不思議じゃありませんけれども、京都とか大坂とか堺の商人たちも集まってきているということが分かります。つづいて、「さらにさらに晴れがましきことどもにて候、遊山多く候間、際限なき名酒ともに候、京・大坂・堺の酒ともに候、全ては推量これあるべく候、海辺に候間、時ならぬ海藻、ハゼ、さざいはサザエですね、にし、貝ですね、あわび、名も知らぬ貝ども、遠礒へ日々におのおの同道申し候でまかり出、拾い集め、料理申し候、鯛、鱸などの躍り回り候を、手柄次第に料理申し候」ということが書いてあって、酒はたくさん全国の銘酒があると書かれてあります。また、海がそこにあるので、暇なときは海に入っていって、みんなで手づかみで魚を捕まえてきて料理しているみたいなことが書いてあるので、非常ににぎわっている様子が伝わってきます。

そういう中で２つほどエピソードを取り上げたいと思いますが、１つは、先ほどから申し上げております大名の陣屋についてです。これは５番のところですね。「御屋形様の御陣場は —— 御屋形様は佐竹です。佐竹の御陣場は西の海際にて候、峰を去り、取り塞ぎ候、殊のほかおびただしき陣場にて候」とあるから、丘陵のてっぺんを削平して、平地にならして広いスペースをつくったということだろうと思います。「左候て上方衆も御褒美申され候由候」ということなので、上方から来た連中というのは、当時でいえば一番日本の中で進んでいるところにいるわけですから、そういう先進的な大名から

見てもここはとてもいいところだというような意味だろうと思います。

ちょっと先に行きますけれども、当陣の後ろの方の峰には、佐竹の陣屋の後ろのほうには石田三成の本陣があって、「ひとしお涼しき地形に候」とあります。佐竹の陣屋の後ろには石田三成の陣屋があるわけだけど、石田三成の陣屋が涼しき地形というのは、別にそこだけ風が吹いているわけじゃないだろうから、スマートというか、ちょっとこじゃれたというか、そんな意味だろうというふうに思います。そして、「前のほうの峰には大谷殿御陣に候、その前には上杉景勝の御陣に候、それより引き続き増田殿をはじめ、房州衆、国綱殿御陣取り候、さらにところどころの峰々あくところなく御城際には云々」ということで、旗本の名前が出てきたりしています。そして、さっき申しましたけど、「山には陣所が置かれて、谷々は皆町にて候、東北南はいまだ見申さず候、なかなか五日十日にはなり難く存じ候由申し候」ということで、佐竹の陣屋に接近して石田の陣屋があって、その隣に大谷の陣屋があって、上杉の陣屋があって、増田の陣屋があるというふうに書いてあります。ここしか具体的な記述はないんですけれども、実は佐竹が何故常陸の水戸から秋田に移封されるかというと、関ヶ原の合戦のときに西軍か東軍かはっきりしなかったんですね。それは何でかというと、石田三成を通じて佐竹は秀吉との関係を結んでいました。同じように大名と秀吉の関係を取り結ぶ子飼いの家臣たちがいるんですね。それが増田長盛とか、大谷吉継とか、石田三成とかなんですけれども、この屋敷の配陣というのは、実はそういう人間関係が反映しているということがここで分かります。要するに佐竹の陣屋の隣に石田の陣屋があるというのは、たまたま隣になったわけじゃなくて、佐竹とか上杉は増田とか石田を通じて秀吉と交渉していくわけですね。だから、単に機械的に割り振られたんじゃなくて、そういう大名の秀吉との人間関係がこの屋敷割に反映しているというふうに考えることができるので、本当に簡単な記述なんですけれども、非常にいろんなことを考えさせてくれる史料になります。さらに「峰々あくところなく」、さっきからずっと言っているように山は陣所、谷は町という区別があります。「御城際には小姓衆、あるいは五百、六百、あるいは千、二千ずつ連れられ候、人々取り付けられ候、谷々は皆町にて候」とあって、本城に近くなっていけば大きな大名ではなくて、ちょっと小規模な大名ですね、江戸時代でいえば旗本級の人たちが名護屋城の本城の周りに屋敷を造っていくということが書いてあります。そして、佐竹の陣所は西の端にあるから、西のことについてはこういうふうにして詳しく見ているんですけれども、東と北と南はまだ見ていませんと。何で見ていないかというと、これを見ようと思ったら、10日や５日は平気でかかってしまうから、まだ見ていないよということを言っている。要するにそれだけ、10日かかっても全部が見渡せないぐらいの、大規模な地域に大名の陣所が広がっているということがここから分かってきます。

面白いのは、全国各地の大名がそこここにいるんですね。「家康、政宗、宇喜多殿、蒲生殿、そのほか西国衆、甲斐、信濃、加賀、越中、出羽、奥州、そのほか諸国の軍勢限りなく取り付けられ候、左候間、日々に小旗、小指物、ほろ、のぼり、御陣御陣に張り立て候間、誠に弥生の頃、山々の花を見渡し候様に候」ということで、春３月の桜の満開のところを見ているように、あっちこっちの山に陣所があって、そこがそれぞれの自己顕示じゃないですけど、旗指物とか、いろんな飾り物を立てていて、物すごくカラフルだったんでしょうね。それが「弥生の頃の山々

の花を見渡し候様に」と、せめておまえにも見せたいぞというようなことを言っていますから、相当ににぎにぎしいというか、晴れやかなというか、戦争しているんだから晴れやかとは言っちゃいけないかもしれませんけど、そういうさまを見ることができます。その後に、さっきちょっと紹介した全国から商人が集まってきているという言い方をしているところがあります。

もう一つのエピソードは、秀吉と肥前名護屋ということなので、肥前名護屋に乗り込んでくるときの秀吉の様子を描写した記述がありますので、そこをちょっと紹介していきます。「殊さら四月廿五日に太閤様ここもとへ御着を見物申し候」、４月25日に秀吉が名護屋に入ったことは先ほどの菊亭家の記録でも証明されていることですから、これは歴史的な事実であります。まさにこの資料が正しいことを伝えているということの証明にもなるんですけど、25日に秀吉が名護屋に入ってきたところ、ここが面白いところです。「上様にはお作りひげをなされ候」、つけひげをしてきたというんですね。同じく「御作りなでつけに一そくに御髪遊ばされ候、いずれも黒々なされ候」、つけひげをして、どうもかつらをつけているようです。それも黒々としたやつのようです。「関東へ御発向の時分は、白くおひげをなされ候由申し候」といって、秀吉はさっき言いましたが、会津まで行っているから、そのときにも佐竹は常陸の大名ですから家臣の平塚滝俊も実際に見ているんですね。そのときの秀吉はひげが白かった。今回黒くなっているということを言っています。このときの白ひげもどうもつけひげだったらしいんですけど、それは当時の「当代記」という史料に出てくるので、どうもつけひげだったんでしょうが、このときは白くて今度は黒いと。この間見たときは白髪だったのに今度は黒いなというのが面白かったんでしょうね。

実は、これはただ単に笑って済ませる話ではなくて、ひげがあるということはどういう意味があるのかというと、これは歴代の中国の皇帝の肖像になります。秦の始皇帝、漢の劉邦高祖、それから元のフビライ・ハン、これが明帝国の永楽帝であります。言われてみないと気がつかないかもしれませんけど、皆ひげを蓄えています。特に顎ひげじゃなくて頬ひげ、今頃こんなことを言うと怒られそうですけれども、これが男性の権力を象徴する装置だったらしいんですね。中国の皇帝というのは、この頬ひげを生やすのが一つのパターンというか、そういうことでありました。そういうことを下敷きにして、ここを見ていくと、秀吉はわざわざ黒くなったつけひげをして名護屋に入ってきているんですね。何で名護屋に入ってきているかというと、話を元に戻しますけど、中国を攻めようとして入ってきているわけです。ということは、この間まで白かったつけひげを黒くしたというのは、単に見た目のことではなく、俺はチャイナのエンペラーを打ち破るんだぞ、そのために来ているんだぞということを知ろしめすために、こういういで立ちをしてきている。普通だったら、輿か何かに乗ってくればよさそうなものだけれども、外から見ている人がこういうふうに細かな描写を残しているということは、馬上でやってきているんですね。要するに見せるために彼はやってきているわけで、そういうふうに考えていくと、秀吉の思いというか、そういったものがこの軍事パレードの中に入ってきているし、そのための名護屋であるということが分かると思います。

同じようなことは最後のほうにもあって、金の切り裂きの御のぼり66本、パレードをしていくんですけれども、その中には、例えば、淀君も一緒に来たとかいうことが書いてあったりしていろいろあるんですけれども、ちょっと注意

しておきたいのは、金の切り裂きののぼりが66本あるんですけど、これは日本六十六州を象徴していると書いてあるんですね。「ただし、一か国に一本ずつのおつもりの由申し候」ということで、のぼりが66本あるというのは単に66本あるんじゃなくて、筑前とか、筑後とか、肥前とか、壱岐とか、対馬とか、そういう六十六州が総力を挙げて名護屋に集まって大陸に押し渡ろうとしているんだということを見せつけるために、こういう装置をつくってやってきているということです。

面白そうなエピソードを２個だけ紹介しましたけれども、この史料は最初に申し上げましたようにとても面白い史料なので、少し深掘りをしていっていただければと思いますが、ただ問題は、今申し上げましたように配陣図があって、今のところ、私も自分の本にこういう配陣図をつくったんですけれども、実は佐竹はここにいるんですね。ただ、今の平塚の書状を前提に考えれば、佐竹の陣所はこの辺じゃないといけないんですね。西のほうにあって、この辺に旗本衆がたくさんいて、ここに佐竹がいて、石田もここら辺にいて、上杉もここら辺にいて、増田もここら辺にいないと今の描写が成立しないんですけれども、現在、推定されているのは、佐竹はここにいて、上杉はここら辺にいて、増田がここにいて、石田がここにいて、大谷がこの辺にいるんですね。だから、少なくとも侵攻の当初にあった陣屋の配置と今考えられている陣屋の配置は大きく様変わりしているので、決してこれが間違いというわけではなくて、侵攻当初の段階の陣屋の配置と、それから戦局がずっと変わっていくので、それに従って陣屋の配置転換が行われているんだろうと思っています。

最初言ったように、戦争は７年間続くんですけれども、この間目まぐるしく変転していきますから、当然こういう陣屋の配置にもそれは影響を与えていくんだろうから、こういう古地図なんかを基にして想定の陣屋図はつくられているんですけれども、少なくとも一次史料と比べるとこれには齟齬が生じているので、その齟齬を埋めるための手続をこれから先やっていく必要があろうかと考えています。少なくともどんどん戦局の変化によって変わっていくということは認められることだろうから、あまり固定的にどこは誰の陣屋というふうに考えないほうがもしかしたらいいのかなというふうに思っています。

金の茶室は、復元されたものが来ているので、それを見てください。一言だけ言っておくと、いつもこれを使っているわけじゃありません。何か大きなことがあったときだけこっちを使って、日常は草庵茶室と言いますけど、もう少しシンプルなものを使います。少なくともはっきりしていることは、朝鮮に攻めていって、すぐにソウルが陥落するので、ソウルが陥落したというお祝いはこの金の茶室でやっています。ここに書いていますけれども、金の茶室、史料上では「金の座敷」と出てくるんですが、５月２日か３日にソウルが陥落しますけれども、落ちましたという知らせが着くのが５月18日です。それから10日ぐらいたって、大名とか博多の商人なんかを集めてこの茶室でお祝い事をしていますから、金の茶室というのは、それこそハレの日の茶事であって、通常的には草庵茶室でお茶を飲んでいたと考えてください。

それから、余計な話ですけれども、さっきから紹介しているフロイスの「日本史」なんかにはキリシタン大名のことがたくさん出てくるんですけれども、秀吉から怒られて大名の身分を剥奪された高山右近なんかと秀吉が名護屋でお茶を飲んでいるような記述も出てきますが、それは恐らく草庵茶室のほうでやったんだろうと思います。そういうキリシタン関係の資料を見

ることで、名護屋の日常というのはもう少し理解が深まっていくのではないかとも考えているところです。

さて、この名護屋は、もともとは恒常的な都市ではなかったんですね。あくまで朝鮮に押し渡っていくための前線基地として機能していました。それがある段階から恒常的な都市に変わっていくことになります。それは何かというと、「変容する名護屋城の位置づけ」と書いていますけれども、さっき申し上げましたようにソウルが陥落します。ソウルが陥落すると、秀吉は気の早い人で、来年には北京も落ちるだろうと、明帝国も滅びるだろうということで、明帝国が滅びたら日本の天皇を京都から北京に移すという計画を持っています。これは江戸時代の大名がそんなばかなといって一蹴した史料なんですけれども、最近は真面目に考えなければいけない史料だと言われています。秀吉は少なくとも真面目に北京に行くつもりだったし、日本の天皇を北京に移すつもりだったということで、北京にも天皇を持ってきて、日本にも別の天皇を立てる。楕円的構造と言いますけれども、要するに中心が２つあるということです。京都と北京の２つ都を持つ連邦政府みたいなものをどうも秀吉はつくろうとしているわけですね。その中で、囲っていますけれども、「高麗之儀は、岐阜宰相か、しからずんば備前宰相参らるべく候、しかれば丹波中納言は九州に置かるべきこと」ということで、大陸と日本との間に、高麗と九州が入ってくるんですけど、北京と京都には天皇を１人ずつ置いて、朝鮮と九州には留守居を置くんですね。しかるべき留守居というのがどこに置かれるかというと、これは当然、名護屋ということになってきます。

すなわち、ソウルが陥落して、北京が陥落した後には日本からアジア大陸に拡がる帝国をつくるわけで、そうなってくると、日本と大陸の間の行き来を連結する都市が必要になってくるから、それが名護屋になってきます。九州といったら恐らく名護屋だと思います。ということは、それまで単に秀吉が大陸へ渡っていくためのポイントだった御座所という性格が、これは臨時的なものなんですけれども、恒常的なものにここで変わっていくことになる。三都と言われていますけれども、イメージとして一番近いのは、古代博多にあった鴻臚館とか、白村江の後に太宰府に引っ込んでいきますけれども、そういう外交とか軍事とかを担当する部署が名護屋に想定されたのではないかというふうに考えています。そうなってくると、この城というのは臨時的に造っていく城じゃなくて、ずっと日本が朝鮮半島や大陸なりと行き来をしていくための恒常的な永続性を持った都市が必要になってきますから、この段階で臨時的な都市から恒常的な都市に移行するというのが私の考えです。つまり、秀吉の軍勢がばあっと朝鮮に行ったらここは誰もいなくなるわけですけれども、ずっと支配をし続けていかなければいけないから、そういう意味での大事なポイントになっていくという考え方になります。

そういう反映として、これは「大和田重清日記」といってやっぱり佐竹の家来の日記なんですけれども、文禄２年４月から12月まで書いている日記で、これに第２とありますから１冊目があったんですね。１冊目があれば朝鮮出兵研究なり日本の豊臣政権研究というのはがらっと変わるはずなんですけど、残念ながら確認されていませんので、途中からの話になっていくんですけれども、これを見ますと４月18日から始まっていくんですが、御城普請とか、名護屋御普請とか、４月29日、御城の石敷普請とか、それから４月30日、御城へ普請に参るとあって、ずっと普請が続いています。

時系列を整理しなければ分からないんですけ

れども、実は戦争をやっている途中にも名護屋城はずっと増強整備を続けているんです。さっき申し上げましたように、いつ完成したかじゃなくて、ずっと造り続けられていって、どうも文禄２年４月の末日までは少なくとも普請をやっていることがこの日記から分かります。それは何のためかということなんですけど、恐らく名護屋を恒常的に機能させるためではないかと考えています。

それで、この日記の５月15日になって唐の官人着岸ということで、冒頭ちょっと申し上げましたけれども、明国の使節が名護屋にやってくることになります。以前はこの人たちを迎えるために石垣の普請をずっと継続しているのかなと思っていましたが、このニュースが入ってくる前からずっと普請をやっているので、明からの使節が来るのを迎えるために普請をやっているというのは、一個一個の事実を組み立てていくとどうも順番が合わないので、明帝国がどうかこうかは別として名護屋城の石垣普請というのはずっと継続して続けられたということが分かります。そして、唐の官人がやってくるということで、肥前名護屋城図屛風というのは、実はそのときのさまを描いたものになります。

ここに御座船とか安宅船がありますけれども、ここに着岸して名護屋城に向かって上っていく行列がありますが、これが明使節の一行になります。ということで、この絵というのは、まさに文禄２年５月15日を描いた図と考えることができます。その意味で画期性があるわけですね。ここで戦争が終わりますので、５月15日に明の官人を受け入れますから本当は15日なんでしょうけど、秀吉は日付を遡らせて、「五月朔日」付でいろんな政策の切替えを行っていくことになります。というのは、明の使節を受け入れたということは明が降伏してきたということになりますので、ここで戦争は終わったことになります。戦争が終わったので、戦中のいろんなことを整理するわけですけれども、一つの問題は、豊後の大友とか、これは分家ですけれども薩摩出水の島津、それから名護屋の領主であった波多、こういう３人の大名を取り潰してしまいます。秀吉の意識としては、戦争には勝ったのだけれども、本来の目的である明を攻め滅ぼすことはできなかった。ということは、どこかに責任を負わせていかなければいけない。その責任を負わされたのがこの３人の大名になります。それぞれに政治的な意味合いが違います。鎌倉以来の名門であっても潰されるときは潰されるんだというのが大友家。島津は鹿児島の本家が軍勢を集め切れずに、「日本一の大遅陣」という大失態を犯すんですね。その見せしめにするために鹿児島の島津の分家であった出水島津家が潰されていきます。それから、名護屋の地元の波多も潰されますが、これは何でかというと、恐らくこの名護屋がこれから先、日本と大陸を結んでいく結節点になっていくので、そのためには誰であれ、領主がいると邪魔なので、それを排除する目的だったんだろうというふうに考えられます。要するに日本と大陸を結ぶ中継地点だから、その時点で、誰かの —— 波多という大名の領地に実は名護屋城は建っていたんですね。それを秀吉のじきじきの支配の下に置くことになっていきます。ということで、波多氏改易後の名護屋城の周りの領地に徹底的な検地を加えていきます。その史料がこの後です。後の五奉行の一人とされる長束正家の指示で、荒れ地がどうなっているとか、こうなっているとか、徹底的な検地を実施していきます。これは何でかというと、恐らくこれから先、名護屋の都市的な機能をずっと維持していくためにはバックグラウンドが必要になってくるので、名護屋の地域の都市的な機能を、最初言ったみたいに元は何もないところだったから、手を引いてし

まうと何もないところに戻ってしまうので、そうならないように徹底した検地をやって、バックグラウンドを整備することによって名護屋地域の都市的な機能を維持するための基盤整備として行われたんだろうと考えています。

そんな感じだったんですけれども、冒頭申し上げましたように秀吉が帰ってしまうと名護屋は留守になってしまうんですけど、これで直ちに名護屋の都市的機能がなくなったわけでは実はありません。朝鮮半島にはまだたくさんの大名が残っているわけです。秀吉も帰ってしまうし、度々ふれてきた常陸佐竹も８月18日には名護屋を発って、その日のうちに博多辺りまで戻っていきます。もう、東日本の大名は帰ってしまうんですけど、九州とか西日本の大名はまだ朝鮮半島に残っていますから、名護屋はそこの兵たんを補給する上でもとても大事な役割が残りますから、まだ機能し続けます。いつまで残り続けるかというと、恐らく関白秀次が死ぬときまで名護屋城は機能し続けるというふうに考えています。

ちょっと細かい話になりますけれども、秀吉は自分のおいの秀次に関白を譲って、自分は朝鮮から北京に行こうとするわけですけれども、結局は名護屋から戻ってきます。戻ってくると、今度は自分の子供の秀頼がいるもんですから、この秀次がどうしても邪魔になってしまう。この人を京都から追い出すためにどうするかというと、秀吉に代わって名護屋に行けと、秀次に命じるわけですね。だから、文禄３年の年末の資料ですけれども、「明後年は筑前中納言、備前中納言、初めて渡海せしめ、関白殿、まず名護屋まで動座あり、手だての儀云々」ということで、文禄５年を期して秀次が秀吉に代わって名護屋に下向し、それから、要するに秀吉がやった最初の朝鮮出兵から比べると、一つ世代が若くなる形でもう一度朝鮮出兵を始めようとしているんですね。秀次が名護屋に来ることになっていますから、この段階までは少なくとも秀吉の中で名護屋はやっぱり朝鮮半島、中国大陸に向けての渡海拠点であり続けたということが分かります。

実際どういう陣立てだったかというのは、これは島津家の資料に残っているんですけれども、最初のときとほぼ変わらないぐらいの大軍勢が朝鮮半島に押し渡っていく計画でありました。加えて秀次が名護屋に入ってきますから、名護屋で秀次をバックアップする大名たちが名護屋城の周りに恐らく１回目と同じように陣所を造って入るんだろうと思いますけれども、名護屋に常駐することを命じられた連中がこの連中になります。有名なところでいくと、江戸幕府の２代将軍になる徳川秀忠、それから前田利家の長男の前田利長、それから細川忠興、こんなところですね。すなわち秀吉からすると、次の世代、豊臣秀次、徳川秀忠、前田利長、この辺の次世代のメンバーが名護屋に新たに陣取って新たな朝鮮出兵を行う計画でしたから、秀吉がいなくなってもこの段階までは少なくとも名護屋の都市機能は維持されたと考えることができます。

ところが、御案内のように、この前年、文禄４年７月に秀次事件というのが起きて、秀次は切腹。これも最近は切腹させられたんじゃなくて、勝手に切腹したから秀吉が怒ったという学説が唱えられていて、私もその論争には関心があるんですけれども、朝鮮出兵の影響も少し考えたほうがいいんじゃないかなと思っています。いずれにしても、名護屋に来るべきであった秀次が腹を切って死んでしまいますので、ここで関白秀次が名護屋に入ってくるという計画はなくなってしまいます。秀吉は秀次に譲った聚楽第なんかも徹底的に破壊しますから、恐らくこの秀次事件との兼ね合いで名護屋城の都市的機能というのは大幅に押し潰されてしまうんじゃ

ないかとも考えています。

あと図録に原稿を書いているんですけれども、枚数の制限があって最後のほうがちょっと尻切れとんぼになっているんですけれども、秀吉がいなくなったから名護屋の都市機能が一遍に落ちるんじゃなくて、秀次事件の頃まではどうも名護屋城は次の朝鮮出兵、大陸侵攻に備えて都市機能を維持していたと考えるべきなんですけれども、秀次事件の後は名護屋ももう要らないと、聚楽第を徹底的に壊したのと同じで、秀次に関わったものは全部排除するような感じがありますから、その辺でかなり名護屋の都市的機能というのは落としていくんじゃないかと思います。

その秀次事件の後に、慶長の役が始まるんですけれども、慶長の役のときの大名の動きを細かく見ていくと、例えば、鹿児島から来る島津の軍勢は平戸から壱岐に行くんですね。平戸からすぐ壱岐に行って、対馬を通って朝鮮半島に行って、どうも名護屋には寄っていないようですし、中国の毛利の軍勢も名護屋まで来ずに博多湾辺りから壱岐に渡っていっているみたいなので、慶長の役のときに名護屋がどれぐらい機能していたかというのは、ちょっとこれから先考えていかなければいけないところですけれども、かなり存在感は薄くなってきているというふうに思っています。

そういうことの一つの証例なんですけど、秀吉が慶長３年８月に死にますが、その数か月前、慶長３年の正月に出された手紙なんですけれども、「博多へ当春御座を移さるべきにつき、御普請並びに九州御用共云々」で、「博多に至り下向の上は」と書いていますけど、博多へ当春だから慶長３年、この年に亡くなってしまいますから、実際に秀吉が亡くなる年に博多に来ることはなかったんですけれども、秀吉が元気であれば慶長３年に博多に来るので、博多に御座所、実質的には城を造るという計画がここで再浮上してきます。つまり、この段階ではもう既に名護屋ではなくて、もう一回博多に拠点を移すという考えがどうも秀吉にはあったようなのです。そのことの反映として、秀吉が死んだ後に朝鮮から —— 秀吉が死んだのが８月ですから、これは８月の資料なんですけれども、朝鮮に渡っていた日本の軍勢はどこに帰ってくるかというと名護屋じゃないんですね。実は、博多に戻ってくることになります。ということで、さっきの博多に城を造って、そこに秀吉がやってくるという慶長３年の正月の資料と、実際に秀吉が死んだ後、軍勢は博多に戻ってきていますから、少なくともこの段階で朝鮮半島や大陸との中継点というのは名護屋じゃなくて博多になっています。まだピンポイントでどこというのは決めかねているんですけれども、恐らく秀次事件の持っている意味というのは中央の政局だけのことじゃなくて、肥前名護屋の問題を考えていく上でも大きなポイントになるのではないかと思います。取りあえず、また次どこかで話すときは違うことを言っているかもしれませんけれども、今日の段階では、いろいろ考えていくと秀次事件とともに肥前名護屋の都市的機能というのは著しく圧縮、すぐになくなったわけじゃないと思いますけれども、そこで大きく政治的な位置を変えていったのではないかということが今日の段階での結論になります。

お粗末でしたが、これで私の話を終わりたいと思います。

（拍手・終）

（編集は、中野等氏確認のうえ、佐賀県立博物館学芸員の松本尚之が行いました。）